

博士 (2016 年度)

東京のインナーシティにおける「多文化空間」形成に関する社会学的研究 ——新宿区大久保における保育所と関わる事例を通して——

大野 光子

本研究は、都市化—郊外化—再都市化といった社会変動過程において、その影響が顕著に現れてきた、東京のインナーシティに関心を寄せるものであり、現代の東京のインナーシティの特質を明らかにすることが本研究の目的である。

1965 年以来、東京の都心部は、定住先としては人びとから選択されづらい傾向にあり、1990 年代後半まで約 30 年の間、都心部の人口は減少し続けてきた。しかし、1990 年代末からこの流れが転換する。1990 年代末以降東京都心部の人口は、増加傾向にあるのだ。本論文で調査対象地域としている新宿区では、人口減少は 1997 年でストップし、1998 年から増加に転じて以降、現在 (2016 年 5 月現在) まで増加を続けている。いわゆる、人口の都心回帰現象と言われるものだ。そして、このような、東京の都心部における都心回帰現象の中心的な担い手は、ヤングアダルトの専門・技術的職業従事者と販売・サービス職従事者であることが明らかにされている (松本 2004)。現代の大都市東京のインナーシティは、人口の都心回帰が起きていることが、大きな特徴の一つとして挙げられる。

インナーシティを調査対象とする社会学的研究は、1892 年以来、シカゴ大学社会学部を出発点として盛んに取り組まれてきた。日本の都市社会学においても、インナーシティを調査対象とする研究は数多く存在する。そのなかで、1980 年代後半以降にインナーシティに大量流入した外国人住民の生活世界や生き方を通して、インナーシティの特質を分析してきた研究の一群がある。これらの研究では、インナーシティにおけるエスニック・マイノリティの多様性に着目し、インナーシティ及び大都市構造の積極的な特性として取り上げてきた。近年、これらの研究の連なりは、「都市エスニシティ研究」と呼ばれ、都市社会学のなかの一つの潮流を成すまでになっている。1980 年代後半以降の外国人住民の急増と地域への定着という、現代の日本社会の変遷を考えると、「外国人住民」という観点から地域社会を見たとき、現代的な社会の特質が見えやすくなることに間違いはない。確かに、都市エスニシティ研究が提示してきた、都市の内実やそこに潜んでいた社会構造は、学問的な発展、また実社会における課題の解決に貢献してきた。しかし、筆者の考えによると、現代の大都市インナーシティの特質は、先にも述べたような、人口の都心回帰を背景として、従来から大都市インナーシティの特徴として、注目され続けてきた、エスニック・マイノリティの多様性に加えて、新住民層としての専門・技術的職業従事者や販売・サービス職従事者の意識や価値観が持ち込まれ、その社会的多様性は進行するばかりである。従って、それは、エスニック・マイノリティの多様性がインナーシティの主たる特質であるとの従来の枠組みでは捉えきれなくなっている可能性が高い。言い換えると、人びとの生活世界などを通して、大都市インナーシティの特質を分析してきた、1980 年代後半以降の日本のインナーシティ研究は、エスニシティ研究に傾倒し過ぎてきたきらいがあり、そのことによって、社会的多様性が見えづらくなってきた可能性があるといえる。

都心回帰組の担い手が、インナーシティの住人として新たに加わることによって、地域

にどのような影響を与えているのだろうか。都心回帰現象の主な要因としては、都心部の再開発事業などによる都心部の住宅（マンション）建設の大幅な増加が指摘されている（富田, 2004; 川相, 2005）。新宿区においても、1981年以來現在まで、市街地の再開発事業による住宅建設などが継続的におこなわれてきた。このような、都心部の再開発を要因とする中高所得者層の人口増加は、ジェントリフィケーションに他ならないが、ジェントリフィケーションにおいて近年問題視されている、低所得者層の地域からの排除といった、負の側面は、インナーシティ新宿、大久保では見られるのだろうか。また、都心回帰の担い手たちの生活や価値観は具体的にはどのようなものなのだろうか。本研究では、インナーシティに住まう外国人住民と、さらに再都市化の担い手となる人びとの価値観、生活様式や地域へ与える影響などを保育所の事例を通して明らかにし、さらに、これらの知見をもとに、現代の大都市東京のインナーシティの特性を分析する。

本論文は、以上のような問題意識と目的のもと、次のような構成によって執筆された。第1章「インナーシティに関する社会学的研究の系譜」では、インナーシティに関する社会学的研究の系譜を辿りながら、これまでインナーシティがどのような空間として語られてきたのかを明らかにした。その結果、インナーシティの特徴に関する記述については、国内外の既存研究において、かなりな程度の重なりが見られ、さらにそれらは、ルイス・ワース（Louis Wirth）とハーバート・ガンズ（Herbert Gans）の都市及びインナーシティの研究に集約できることが分かったため、本章第4節以降では、ワースとガンズの論考に依拠しながら、インナーシティ研究の枠組み構築に向けて、指標となるものの検討をおこなった。

第2章「インナーシティに関する近年の動向」では、インナーシティに関する近年の研究動向を概観し、知見や課題を整理した。その後、前章第1章において検討した、インナーシティ分析のための指標を統合するかたちで、本研究における分析枠組みの構築をおこなった。そして、本研究における、事例分析のための分析項目として次の5つを設定した。

(1) 「盛り場」形成を中心とした、インナーシティの地域史、(2) 人口動態、(3) 多様性と流動性の分析、(4) 地域における「多文化共生」の取り組み、(5) 国境を越えた移住者の形成する社会空間、である。

第3章「大都市東京のインナーシティの現在——新宿、大久保を通して」では、インナーシティ新宿、大久保の現在の特徴を明らかにするため、第2章において提示した分析枠組みに沿って、当該地域の分析を試みた。そして本章結論部において、各分析項目において得られた結果を整理しながら、インナーシティ新宿、大久保の現在の姿を描いた。その結果、本研究では、インナーシティ新宿、大久保を多様性の進行する様を表して、「多文化空間」と呼んだ。従って、本章以降の各章は、「多文化空間」の実例として準備されたものであり、これらを通して、現代の大都市東京インナーシティの特徴としての「多文化空間」の様相を、さらに現実味をもったものとして提示することを試みた。

第4章「『多文化空間』新宿、大久保に生まれた保育のニーズ——24時間保育園『エイビイシイ保育園』を通して」では、大久保に在る認可の24時間保育園「エイビイシイ保育園」の設立過程や利用者の特徴、そして、利用者のインタビューデータを通して、「多文化空間」である新宿、大久保に生まれた保育のニーズや課題を明らかにし、さらに、都心回帰の担い手の価値観や生活様式を明らかにした。

第5章『「多文化空間」新宿、大久保における保育運動——エイビイシイ保育園の認可獲得運動を通して』では、エイビイシイ保育園がおこなった、認可獲得のための運動の背景や展開過程を詳細に記述し、大久保において、なぜ認可の24時間保育園の設立が実現したのかを明らかにすることにより、「多文化空間」大久保の地域性をより明確なものとした。また、制度化されたことによる成果とそれによって、その網からこぼれ落ちてしまった人びとの存在について指摘した。

第6章「無認可の24時間保育園における子育ての実態」では、無認可の24時間保育園「I保育園」を取り上げた。エイビイシイ保育園のある新宿区内には、他にも24時間の保育園が複数存在するが、それらは全て無認可の保育所のため、行政などの公的機関は必ずしもその数や内容などの実態を把握していない。本章では、14年前から新宿の歌舞伎町において、無認可の24時間保育所として保育をおこなう「I保育園」を事例に、そこで働く、保育士と利用者に対して、インタビュー調査をおこない、それらのインタビューデータをもとに、無認可の24時間保育園における保育実態、また母親の子育て実態に迫った。そして、これらを通して、「多文化空間」における、保育ニーズをさらに強固なものとした。

第7章『「多文化空間」における保育所の利用者及び利用状況について——調査票調査の結果をもとに』では、新宿区内にある保育所5ヶ所、計115人に対しておこなった、調査票調査の結果をもとに、「多文化空間」における保育ニーズと課題について、量的調査の手法を用いて、改めて分析をおこなった。その結果、対象とした地域では、利用者の職業上の特徴と関連して、保育時間のニーズを固定化することが難しく、多様な保育時間のニーズに応えるためには、「24時間保育」というかたちが必要となることが改めて示された。また、利用者の特徴として、裕福層がその中核を成している一方で、シングルマザーと外国人住民の世帯年収の低さが浮き彫りになり、彼ら／彼女らが、保育所利用において、経済的に厳しい状況に置かれていることが明らかになった。このように、シングルマザーと外国人住民は、保育所の利用において、経済的に厳しい状況に置かれていることと裏腹に、24時間保育のニーズが切実であることが、第4章、5章において既に明らかになっており、そのため、外国人住民とシングルマザーについては、エイビイシイ保育園のような認可の24時間保育園の入園が適切であることを主張した。しかし、同時に、認可保育園は、サービス職に就く外国人やシングルマザーにとって入園のハードルが高い場所となっていることがこれまでの章から明らかになっており、特に、風俗業に就くシングルマザーは、認可保育園の入園制度の枠外に置かれてしまっていることを指摘した。故に、24時間保育のニーズが明らかとなっている「多文化空間」においては、ニーズのあるひとに適切なかたちで保育サービスを提供する仕組みを考え直す必要があることを課題として提起した。

第8章「現在の大都市東京のインナーシティの特徴」では、本論文の結論を示した。先ず、本研究の問題意識、目的、そして保育所を事例とすることの意義を改めて述べた後、各章の結論をまとめ直すかたちで、改めて、「多文化空間」を形成する人びとの多様性と都心回帰の担い手の女性における、価値観や生活様式の特徴を示した。そして最後に、本研究の目的である、現代の大都市東京のインナーシティの特質を次の通り提示した。「多文化空間」とは、多様なエスニシティに関連した働き方、子育て、家族の在り方についての多様な価値観やそれと連動した生活様式、それら全てを包摂する空間のことである。本研究において、「多文化空間」として特徴付けた現在の大都市東京のインナーシティの特質は、

多様な人びとが併存している／することのできる空間のことである。

参考文献

- Gans H., “Urbanism and Suburbanism as Way of Life: A Re-evaluation of Definitions.” In Arnold M. Rose (ed.), *Human Behavior and Social Process: An Interactionist Approach*, 1962, pp. 625-648. (=2012, 松本康訳『生活様式としてのアーバニズムとサバーバニズム』日本評論社).
- 川相典雄, 2005, 「大都市圏中心都市の人口移動と都心回帰」『経営情報研究』第13巻第1号: 37-57.
- 松本康, 2004, 『東京で暮らす——都市社会構造と社会意識』東京都立大学都市研究所.
- 富田和暁, 2004, 「三大都市圏における地域変容」『空間の経済地理』朝倉書店:80-105.
- Wirth L., 1938, “Urbanism as a Way of Life,” *the American Journal of Sociology*, 44: 1-24.